

スポーツ笑談

(1) 勝負の極意

「長嶋ジャパン」の敗因に因んで

アテネ・オリンピックで日本選手が大活躍。高校時代、柔道界の名門・福岡県飯塚市の嘉穂高校柔道部で励んでいたこともあるオールド柔道マンにとっては、とりわけ柔道のメダルラッシュには興奮と感激の連続、とうとうその一週間は昼夜分かつずテレビにかぶりつき、夏の執筆予定もすっかりご破算にしまった。

もちろん、単純明快に感動したのは、最重量級で二回りは大きい巨漢たちを次々投げ飛ばし、まさしく柔よく剛を制して小よく大を投げる柔の醍醐味ちゆうみを見せつけた鈴木桂治選手をはじめとする、なんの外連もない日本柔道の鮮やかさだった。が、且つ感動させられたのが、男女十四人の代表選手中九人までがメダリストという華やかな勝者の陰で唇を噛みながらも敗れてなお潔い敗者の姿だった。かれらは負けて悪びれることなく、ひたすら我と我が身の未熟と弱さに敗因を求め、他に因を転じるが如きはかけらもなかった。中でも、誰もが一本勝ち街道で優勝するものと信じて疑わなかった百キ口級・井上康生選手は、敗れて胸中いか

ばかりか察するに余りある状況の中で、未練がましい言い訳など微塵もなく、ひたすら爾後を誓つて無念に耐え、その渦中にあつてなお選手団主将として最後まで出来うる限りの日本選手の応援に励むなど、まこと大和男の子の真髄を見た。

これに比べて、同じく国民的スポーツの代表であり、金メダルを期待されまたそれを標榜してやまなかつた日本プロ野球ドリム軍団「長嶋ジャパン」の敗戦後の姿には、落胆させられた。「研究されていた」「情報戦に負けた」に始まり、「最高のチームが何で負けたのだろう、理由が分からない」という監督代理の言や、「一生懸命やつて銅メダルを取つた。胸張つて帰国できる」の声を聞いては、その試合ぶりを併せ考え、残念ながら、もともと勝つこと叶わぬ軍団であつたと、改めて痛感した。それでも、勝つ（金メダルを取る）ことは可能であつた。いかにすればよかつたか。病に倒れ、本番の陣頭指揮こそ取れなかつたが、アジア予選における長嶋茂雄の采配を振り返れば、その答は歴然としている。

小兵ながら俊敏な動きで一世を風靡した五八代横綱・千代の富士の全盛時代、少し遅れて六〇代横綱になつたのが双羽黒である。彼は身長・体重ともに千代の富士を凌駕していたが、立ち合い瞬時に飛び込まれては体勢悪く、何度か千代の富士との横綱決戦に敗れて優勝を逃し、揚げ句に言つた。「立ち合い何十分の一秒かの差以外に劣っているものはない」。だから立ち合い五分に渡り合えれば実力差通りに勝てる」と豪語し、その後も立ち合いの早さに努め幾度も敵の胸元に飛び込もうとしたが、都度に遅れてかえつて不利な体勢となり、負け続け

て、ついに一度も優勝賜杯を抱くことなく、相撲界から去った。思うに、俊敏さは天賦のもので、身長低きを高きにすること叶わぬと同じ、立ち合いに拘れば拘るほど彼は体勢を悪くして、負け続けた。彼は何故、自ら優るもので勝負しようとしなかったのか。その点、五九代横綱・隆の里は、賢かった。彼は千代の富士に対して受けて立つのを常とし、それ故相手の動きに隙を見付けては立ち合い五分の体勢によく持ち込んだ。かくして彼は、ポパイと称せられた体格をもって千代の富士を圧倒すること少なからず、優勝回数こそ四回に留まったが、優勝回数三一回の大横綱とほぼ互角の対戦成績を残している。

史上最強の柔道家と言えば、言わずと知れた山下泰裕である。彼は何と、七七年十月から引退する八五年四月まで二〇三連勝を重ね、その間、全日本選手権九年連続、世界選手権三回連続、オリンピック金メダルなど、不滅の金字塔を打ち立てた。しかし、彼はけつして卓越した運動神経の持ち主ではなかった。聞くところでは、握力・懸垂・腕立て伏せ・立ち幅跳び等々、基礎運動能力は格別のものではなかったという。見習うべきは、そうした並の体力・体格で闘う試合ぶりである。彼は、相手がどんなに非力であろうとけつして強引な力技で倒すことなく、常に理に適った柔技やわわざで立ち向かっている。それでこそ、勝ち上がるたび、躰が柔軟になり、技はいつそう冴え渡る。こうして、不敗の王者が出来上がった。比べて今でも残念に思うのは、同時代の松井勲である。彼は高校時代に山下に勝利した実績をもち、十分なる実力がありながら、その後一度とて山下に勝てず、それ故、日本選手権者にもなり

得なかった。体力、技の切れ味共に卓抜、勢い一回戦から相手構わず投げ飛ばす。その様を見て、周囲は今年こそ優勝だと喝采したが……。よろしきコーチに出会っていたらと、つくづく彼の不遇が嘆かれる。

ところで、このようなこと、得々と述べ立てると、貴殿はさぞや格闘技の名コーチになれたのではないか。道を過つたのではないかと皮肉る向きが出るやも知れぬ。そう、驚くなれ、何を隠そう、ハワイ出身第六七代横綱武蔵丸を横綱にしたのは、誰あるう、この私なのだ。???。いきさつは、こうである。

この十年ばかり、盛夏を過ぎて秋立つ頃、毎年、六本木のサントリー小ホールに出向いている。友人の都留文科大教授・鳥居明雄氏の御令閨で、シヨパン演奏家として定評のある鶴田留美子さんの恒例のピアノコンサートを聴いて心身をリフレッシュするためである。そして、コンサート鑑賞後に必ず、ホール前のイタリア料理店に入るのであるが、ある年、妻と二人、いつものように馥郁たるワインの香りで余韻を楽しんでいるとき、隣席に突然四、五名の男がドヤドヤとやってきた。見るからに格闘家と思わせる大男たちで、その真ん中に、あの上野の西郷さんとも見まがう武蔵丸が居た。彼らの話は何やら早くとも聞き取りがたかったが、それより何より当時の私には、その武蔵丸に興味があった。当時大関の武蔵丸は、一九二cm、二〇〇kg余の巨体を持て余し、得意の突っ張りに鬨りが生じ、時に四つ相撲を試みるなど、横綱昇進を前に伸び悩み、苦悩していた。そんな彼を、テレビ解説の親

方たちは皆一様に批判していた。「四つ相撲は墓穴を掘るようなものだ。なぜ、巨体を生かした突っ張りに徹しないのか」。武蔵丸は迷っている。いい機会だ、助言してやるう。私は彼らの話の途絶えるのを待ったが、なかなかチャンスがやってこない。そのうち、武蔵丸が私の無遠慮な視線に気付き、嫌がったのか、料理がくる前に、ウエイターを呼んで、そろって奥の特別室に消えてしまった。そこで諦めないのが私である。帰り際のレジで、武蔵丸宛に、骨子次のような走り書きを依頼した。「武蔵丸君、突っ張りは隙をつくって時に足許を掬われるから止めよ。四つ相撲なら、抜群の体力と反射神経をもって、多少の不利な体勢でも逆転できる。もし四つ相撲の極意を会得したら、稀代の大横綱になれる」。嘘か真か、次の場所から、彼はぎこちないながら四つ相撲に変貌し、三場所後から連続優勝を遂げて美事横綱昇進を果たした。この話、いつか武蔵丸が陰の恩人として世に洩らすだろうと笑って妻子が言うが、まだそれらしき噂もない。

閑話休題。

碁であれ将棋であれ、格闘技であれ球技であれ、およそ勝負事は、巨人が小人^{こびと}を相手にするのではない限り、相手との関係性の中で我と我が身をよく認識し、着実堅固にやることこそ、王道だろう。闇雲に力を振るえば、必ず基本が崩れて隙が生じ、無残な報いがやってくる。米大リーグに渡ったイチローは、大男や快速球の中にあつては、日本球界でならゆうに年間三〇本は打てるホームランを封印し、ジャストミートの単打打法に徹して、今の成功を

導いている。これしきのこと疾うに熟知の長嶋茂雄は「つなぐ野球」を標榜し、アジア予選で「ドリームチーム」に全試合一本のホームランもない着実な攻撃を実践させた。結果はまさに無敵の進軍。しかるにアテネにおける「長嶋ジャパン」、長嶋イズムをどこぞに忘れ、弱きに向かつて長打連発、而して準決勝でもろくも0敗。けだし、負けて当然、無残な「ドリームチーム」ではあった。

さてさて、およそ勝負事を志す者は、見習うべきは山下泰裕であり、イチローであり、そして、覚えるは長嶋茂雄の教えであった。と、素人評論家の傍目八目スポーツ談義、お笑い召され。

(二〇〇四年九月)

(2) 一致団結心こそ

「ジーコジャパン」の敗因

サッカーの二〇〇六年W杯ドイツ大会で、日本代表のジーコジャパンは一勝も挙げることなく、もろくも予選で敗れた。さるところ(NTTレゾナント&三菱総合研究所)が実施した開幕直前のファン調査結果では日本チームの1次リーグ突破を予想する人は二二四人中77%、どこまで勝ち残るかについては、ベスト16が30%、ベスト8が27%、ベスト4が16%、

優勝を予想する人も2%強であつたから、一勝もなきこの予選敗退は、大方の予想と期待をもの美事に裏切つたことになる。が、私も含め、それなり冷めた見方からすれば、至極当然の結果ではあつた。元東京大学総長の蓮実重彦氏は、大会直前の六月三日の『日経新聞』で日本チームの予選突破は無理として、監督も選手も取り立てて傑出することのない日本チームの勝ち負けに一喜一憂するより、真のサッカーファンなら、世界一流の選手とチームのプレイと戦略を楽しむべきだと述べているが、まさしく至言。日本では一流選手とされる中村俊輔や中田英寿らに比べ、ジダン（フランス）やベツカム（イギリス）らの正確で力強いパスやシュート、また、エリクソン（イギリス）やヒディング（オーストラリア）らの見事なまでの監督采配術……。彼我の差は明白で、思わず惚れ惚れさせられた。

このように、勝てる要素の乏しかった日本チーム。それを煽るだけ煽つて、いざ負けてしまえば、手のひら返してその敗因を「体格面で劣る」（ジーコ監督）、「精神的に子ども」（川淵三郎協会会長）などと、敗軍の將が兵を語る。これはいささか、大人げない。しかも、指摘されている敗因も、実は的が外れている。先の蓮実重彦氏は、サッカー競技の魅力は、例えば同じように四六時中動き回るバスケットボールに比べても、背の高さや体格の良さが勝利の決定的要因とはならない、いわばそれらを無化しうるフィジカル「民主主義」が徹底しているところに見い出せると述べているが、まことに言い得て、因みに強豪と言われ今大会で三位になつたアルゼンチン選手の平均身長は一七八糎で日本選手団とほぼ同じである。ま

た、日本選手達はけっして精神的未熟ではない。一昨年中国で行われたアジアカップでの、苦難に充ち満ちたサバイバル戦はまだ記憶に新しいが、未塾な子どもたちなら、どうしてもそのような奇跡に近い優勝劇を演じ得ようか。

では、無惨な負け戦の真の敗因は何だったのか。難しく考えることなぞ全くない。この素人評論家の明解さによれば、それはまさしく簡単、今、時とともに日本人社会から失われつつある一致団結心の欠如であった。

長嶋茂雄氏の「メークドラマ」が流行った頃、プロ野球開幕を前にして、あるラジオ局が、話題の監督数名に、「今年は何なる野球を心掛けるか」とインタビューをしたことがある。「感動を与える野球」とか「メークドラマ」とか、何をどうすればそうなるのか良く分からない抽象的な回答の中であって、ひとり野村克也監督だけが、「分かりやすい野球」の表題で極めて平明かつ具体的に語って見せた。曰く、「イチロー君の野球を見よ。彼の走攻守、どれを取っても難しいことなどどこにもないかのように簡単に見える。野球は本来難しいものではない。イチロー君のような、基本に立ち返った分かりやすい野球を心掛ける」。だから、ビデオを撮っては「ピッチングや打撃のフォームに三十箇所修正が必要」とか「あれはだめ、これはダメ」などといじくり回して選手達を潰してしまうような指導は避け、投げ方や打ち方などに細目はつけず、オーバースローでもアンダースローでも、ダウンスイングでもアッパースイングでも、狙ったところに投げて、打つて、走る野球を実現したい……。その

年、野村監督はヤクルト球団を率いて美事に四回目のリーグ優勝を遂げ、さらに日本一にも輝いた。

バスケットボールやサッカーゲームなどの集団球技もまた同じ、勝利の要諦は「分かりやすさ」にあるだろう。チーム全員が協力一致、球を奪い、それを保持し、繋ぎに繋いでチャンスを作り、ここぞの時にゴールを目指す。これが、勝利の基本的な方程式である。もちろん、奪つ技術、繋ぐ技術、決める技術、そして守る技術は常に向上に努めねばならないが、技能の高低に関わりなく、この方程式を支えるものが、終始一貫、メンバー全員の連携プレイ（コミュニケーション）であり、その根源なるものが「一致団結」であることを忘れてはなるまい。この団結心によってチームが一丸となるとき、勝利の女神は微笑み、奇跡の逆転劇も生まれる。サッカーアジアカップ時のジーコジャパン、野球の第一回世界大会（WB C）時の王ジャパンの成果がその証である。

とは言え、言うは易く行うは難いのが「一致団結」である。何故ならそれは、メンバー全員が自己主張や顕示欲など、可能な限り自我の発揚を抑え、自己犠牲的に全体へ奉仕する構えが根本になければならず、しかもたった一人といえども、自我を抑制できないメンバーがいるなら、それはもろくも瓦解してしまうからである。日本サッカー育ての親とされるデッドマール・クラマー氏は昨年十一月、招かれて来日し、「いいチームというものは、犠牲の上に生きている。中でも、もつとも苦しくて大きな犠牲はエゴを殺すこと」と述べているが

（「クラマーの言葉」後藤優） 個人のエゴがむき出しになったチームは一致団結の対極であり、結果は既に論じるまでもない。一致団結したチームは、個人の能力の総和以上の力（ブラス）を發揮するが、その対極にあるチームは、総和以下の力（マイナス）しか示せない。身の程忘れた個人主義的強振主義で敗れたアテネオリンピック本番での長嶋ジャパンがそうであったし、一戦毎に団結心が希薄になって、最終のブラジル戦では中田英寿をはじめフォワードでもない選手達が連携とメイクチャンス忘れて闇雲にミドルシュートを打った。此度のジーコジャパンがそれであった。

それにしても、あの優駿な中田英寿選手は一体、どこにいつてしまったのだろうか。イタリアに渡ってしばらく経つと、あの冴えわたっていた周囲への目配りと球回しの個人技・集団技が次第に衰え、とりわけ日本代表選手として戻ってきたときの、あの無惨。相手と一对一の場面でも球を奪われ、囲まれては無謀な「キラーパス」を放って、幾度も敵に逆襲チャンスを与え、実際に点も揚げられた。加えて、周囲との摩擦。残念ながら、中田は、イチロー選手とは全く違う。イチローは、実績・技能ともに世界が認める超一級のスーパーヒーロー。彼の言行ならば、嫌でも納得させられ周囲も従おうけれど、対して中田選手は、欧州移籍先でレギュラーメンバーになるにも汲々たる有様。にも拘わらず、マスコミがイチローと同レベルで取り上げ、「孤高の中田」「中田英怒りのゲキ」などと持ち上げれば、本人も周囲も、取るべき冷静な態度をつい見失ってしまうだろう。結局、孤立した中田英寿は、予選一

回戦で負けたあと、「戦略など考えるより、とにかく勝つこと、動くこと」などと子ども如き言辞の末に、個人ブレイ的に動き回り、蹴りまくり、チームの連帯を損ねて、敗戦に導いた。中田を外せば予選を突破できる、というのが私の周囲の大方の意見だったが、既に先週のクラマー氏は、和と輪を乱す中田選手が存在がチームのアキレス腱であることを示唆していた。それがあらぬか、オシム新監督に代わって、中田の（そして海外組の一人として）いない新生日本代表チームの第一戦（対トリニダード・トバゴ）は、全員が伸びやかでかつ自己抑制のきいた連携ブレイに徹し、2-0で鮮やかに勝利した。二つのゴールはいずれも、旧代表チーム内では試合中に中田選手にブレイぶりを指弾されるなどして、かなり憶していた感のある三都主選手によるものであるが、この結果はもちろん、オシム監督がいみじくも述べているように、「結集後たった三日の合宿ではとても取れそうにない コミュニケーション がとれた」こと、即ち 一致団結心 の賜物である。

さて、人が互いに心をついに合わせる 一致団結 という人間性の本質を見失ったとき、スポーツ関係の集団のみならず、小さきは家庭から、大きくは国家まで、あらゆる集団・組織が崩壊する。昨今の日本社会、悪しき個人主義（利己主義）が蔓延し、自己犠牲の心乏しく、利得に走り、弱者を犠牲に我が身を立てるの風潮が著しく、また、いじめ・虐待・衝動的殺人などの非人間的な残酷行為が一向に衰える兆しもない。思うに、これらのすべては、

この日本人社会からこの大切な人間性の本質が失われつつあることに由来する。外を見れば、不穏な北朝鮮、一向に北方領土を返さぬロシア、巨大な経済・軍勢力で迫る中国、ノーと言えない米国との隷従関係……。日本国まさに危うし。今こそ、国民一人一人が、厳しく自覚し、その根本から再生を始めねばならない時ではなからうか。

日本サッカーチームの瓦解と再生の道のりが、いみじくも日本の社会・国家のそれを默示的に象徴しているとの思いから、一致団結心をキーワードに、ジーコジャパンの敗因を語つて、スポーツ笑談2とはなつた。お笑い召され。

追記

ついでにいえば、男子サッカーのジーコジャパンに比べ、女子サッカーの「なでしこジャパン」は、澤穂希らの古参選手を中心に美事に一致団結したチームである。先のW杯予選を兼ねたアジア大会では惜しくも最終試合で破れ、本大会出場権を勝ち得なかったが、終盤残り時間の少ないところまで3点差にあえぎながら、なお最後まで連係プレイに徹し、ついには1点差まで詰め寄せた。体格劣り、技術優らずとも、もって範とすべき戦いぶりであった。

(二〇〇六年八月)